

卵巣がんについて

今回は「沈黙の臓器」と呼ばれている卵巣のがんについて、当院の産婦人科部長・松尾先生に教えていただきます。

はじめに

卵巣は、子宮の左右両側に一つずつある楕円形の臓器で、うずらの卵くらいの大きさがあります。女性ホルモンの分泌や、卵子の貯蔵、成熟、排卵などを行う役割があります。この卵巣に発生する悪性腫瘍が卵巣がんで、婦人科がんの中では最も死亡数の多い疾患です。

初期症状に乏しく 早期発見が難しい

卵巣がんの初期は、ほぼ無症状で経過する為、症状が出現した時には、かなり進行していることも

珍しくありません。昨今、様々な臓器に対し、がんの早期発見の為にがん検診が行われていますが、婦人科検診として行われていますのは、子宮頸がんのみです。卵巣がんや子宮体がんなどでは検診は行われていません。今のところ、卵巣がんの早期発見の為に有効な検査法は無く、人間ドックや婦人科受診をきっかけに、卵巣腫瘍を早期に見つけ、様々な検査を追加して、がんを見つけるしかありません。卵巣がんは他の病気のように、手術前に細胞診、組織診等で確定診断が出来ません。例えば、胃がんの場合は、口から胃カメラを挿

入し、胃の内部像を見て病変を切除し、組織検査をする事も可能ですが、卵巣は体外と直接繋がっていない為、そのような検査をする事が出来ません。その為、卵巣がんの確定診断は手術ということになります。婦人科では、良性の卵巣腫瘍でも、手術による摘出が一般的です。しかし、その腫瘍が悪性ではないことを確認するという重要な意味もあります。

治療について

早期がんの場合は、手術で治療を目指す可能性が高いのですが、進行がんの場合は、抗がん剤の併用が必要になります。目標としては、がんの完全摘出を目指しますが、その為には、手術前に抗がん剤投与を行い、腫瘍を小さくしてから手術をすることもあります。手術は全て開腹手術となり、原則的に腹腔鏡下手術は施行できません。

卵巣がんに適応される抗がん剤は、婦人科がんの中では最も

種類が多く、一部の組織型を除いて効果が期待できます。とは言え、卵巣がんは再発を繰り返すケースも多く、その場合、抗がん剤が効かなくなると、がんが広がる事もあります。

近年、がんの再発予防の為に、分子標的薬の開発が進み、大きな効果が期待出来るようになってきました。分子標的薬とは、抗がん剤と異なり、がんの原因となる異常な分子だけに中心に攻撃する為、俗に言う副作用が少なく、長期使用が可能となります。分子標的薬の投与に関しては、遺伝子検査が必要となる事が多く、コンパニオン診断（分子標的薬の効果が期待出来る遺伝子変異があるかどうかを調べる）、遺伝子パネル検査（一度に複数の遺伝子検査を行い、どの分子標的薬が効果があるかを判断する）が行われてきています。当院では、コンパニオン診断として、BRCA、MSI-H等の検査が可能であ

り、現在治療に役立っています。

最後に

卵巣がんの早期発見の為に、前述した通り、まず卵巣腫瘍の診断が必要です。月経のある方はホルモンの影響により、腫瘍を認めなくても卵巣が腫れていることがあり、判断は困難で、複数回の確認が必要となる場合もあります。当院では、人間ドックや婦人科受診で卵巣腫瘍の有無を確認し、精密検査後に治療、もしくは定期検診を行っています。定期検診の必要性は、卵巣腫瘍のがん化の問題があります。良性腫瘍で経過を見ていた方が、突然、がん化して手術される方もいらっしゃいます。卵巣がかなり腫れてきても、少し太ったぐらいにしか思わず、気づかず放置される方が多いです。皆さまもご心配な時は、人間ドック、産婦人科受診等をお勧め致します。



松尾 隆志

Takashi Matsuo

副院長
産婦人科部長

日本産婦人科学会 専門医・指導医
日本産婦人科腫瘍学会 評議員
癌治療学会 癌治療認定医
日本産婦人科医会 評議員 等



心がけているのは女性のライフステージと、患者さんの気持ちに配慮すること。



学生時代はバレーボール部に所属。産婦人科は院内のバレーボール大会でも優勝常連チーム。